

105 やしまどうそじん 矢島道祖神



設定 市有形文化財 昭和62年10月1日
 所在地 矢島
 所有者 矢島区



道祖神は、サエノカミ、サイノカミ、セーノカミあるいはドウソジン、ドウロクジンなどと呼ばれる（ちなみに矢島には、道陸神坂とよばれた坂=子持坂があった）。旅の神あるいは道の神、境を守る神、悪魔を追い払う神、また子どもの神などとされ、さまざまに信仰されている。その信仰はほぼ全国にわたっているが、石塔を建てる地域は東日本に限られ、なかでも群馬・神奈川・静岡・山梨・長野の諸県に多い。また道祖神の像塔がみられるようになるのは、寛文以後のことで、それ以前はおそらく自然石（異形の石や、陰陽石を思わせる形の石、丸い石など）を神体としたものと思われる。なお、双体道祖神がみられるのも、寛文以後のこととされる。（『日本石仏事典』）。

この道祖神の石祠が、矢島の八幡・諏訪神社境内（字宮脇）に五基ある（造りはすべて流れ造り）。このうちの1基の側面には、造立年が「□永十六年巳卯十月吉日」と刻まれている。最初の文字が磨耗して読めないが、「巳卯」年の「十六年」から、寛永16年（1639）と推測される。そうであるとすると、これは年号のあるものとしては、現時点で長野県内最古の道祖神の石祠になる。ただし、このなかに祀られていたと思われる御神体は現存しない。

他の4基は、寛文6年（1666）1基、貞享2年（1685）1基、宝暦4年（1754）2基である。なお、宝暦4年造立の2基のうち大きいほうの石祠には、陰陽石と思われる石が祀られている。